和名倉百年の森

wanagura hyakunen no mori　NPO法人百年の森づくりの会

2017 10.1 34号

巻頭言……1 ／ 総会・記念講演会……2－5 ／ 田村市植林視察……6－8 ／
和名倉山森づくり報告……9－10 ／ 長瀞町宝登山下刈り活動報告……11 ／
平成29年度　第10回通常総会開催……11

『道～白磁の人』の映画

理事長　小林公彦

日本と韓国は歴史的に深いつながりを持っています。韓国はかつて日本の統治下にあって、慰安婦問題など不幸な出来事も起こっています。慰安婦問題は二〇一五年に日韓合意で解決されたことになっていますが、文在寅（ムン・ジェイン）第十九代大統領は、この日韓合意は国民に受け入れられていないということから、白紙に戻すような発言もされています。また既に解決済みの徴用工問題も再現しようとしているようです。

日本は平和国家として隣国である韓国と付き合っていくことが大事ですが、両国は過去の歴史問題で何かギクシャクしており政治的解決の難しい問題が山積しているようです。

そんな韓国との関係で、ある映画を思い出しました。それは、高橋伴明監督の「道～白磁の人」という映画です。皆様の中にはご存じの方もいらっしゃるかと思いますが、朝鮮の山を緑にする使命感を抱いた浅川巧氏の半生を描いた作品です。

あらすじは以下の通りです。

浅川巧は明治二十四年山梨県北巨摩郡（現在の北杜市）に生まれ、二十三歳の時に当時韓国併合され日本の統治下にあった朝鮮に渡り、朝鮮総督府林業試験場に勤め、養苗や造林研究に従事します。反日感情が日増しに高まる中、一人の朝鮮人イ・チョンリムと出会います。イ・チョンリムは林業試験場で働く朝鮮人で、林業技師として赤茶けた荒廃した山々に緑に戻すため、共に働き、共に語らい、特別な友情を育んでいきます。

浅川巧は、日本人の多くが朝鮮人を蔑視するなか、朝鮮語を熱心に学び、困っている朝鮮人がいれば手助けをし、民族を越えた交流を深めていくのです。彼はまた、朝鮮で日常使われている白磁の壺や椀、また膳やタンスなどの工芸品に魅せられて、収集と研究を重ね、朝鮮文化を広める役割も果たしました。

彼の最大の功績は、朝鮮半島の自然を観察して、露天埋蔵発芽促進法という方法を思いつき、種子を本来の自然の姿に戻して発芽させるやり方で人工的には難しいとされていた朝鮮五葉松の育成に努めたことです。

そして、日本が自国の利益のために荒廃させた朝鮮の山々に緑を取り戻すため、苗を育て、造林しました。

彼は、朝鮮各地で養苗について講演を行うなど多忙を極め、仕事の疲れから風邪をこじらせ、急性肺炎となり、四十歳の若さで急死してしまいます。

ある哲学者が、「かういふ人の喪失が朝鮮の大なる損失であることは無論であるが、私は更に大きくこれを人類の損失だといふに躊躇しない」と記しています。

素朴で純粋で温かみのある、まさに白磁のような人柄で、私利私欲とは無縁に正しい道を歩んだ彼の葬儀は、大勢の朝鮮の人たちに見守られ、朝鮮式に埋葬されました。誰よりも朝鮮の人々を愛し、愛された浅川巧の人間としての生き方は、今でも多くの人に語り継がれています。

実は私はこの映画を見るまで、浅川巧という方を知りませんでした。当時は朝鮮に対して日本人による蔑視や差別があった中で、同じ人間として、朝鮮の人たちと真の友人として関わっていきたいという生き方に深く感銘を受けました。

隣国にあるがため、歴史的に不幸な出来事があったことは事実ですが、文化的、経済的、人道的に不幸な出来事ばかりでないことも事実です。お互いに悪い事実だけを見るのでなく、良い面を理解し合い、未来志向で問題解決を図っていくことが大切であると思います。

百年の森づくりの会も水を育む山にするため、植林のボランティア活動を続けておりますが、引き続き会員の皆さまのご協力をいただき、地道に活動を続けられたらと思っております。

平成29年度 第10回通常総会・記念講演会　平成29年6月11日

『神の心と人の姿』

寶登山神社　宮司　中山　高明

長瀞町の寶登山神社の宮司としてご奉仕しております。神社には氏子がいて、維持運営にご協力戴いているわけですが、会員の中で、野澤和雄さんは現在氏子総代で、野澤さんのお父さんにも以前総代を務めて戴き、息子さんには御鎮座一九〇〇年記念事業で、祈祷殿神札所新築工事の設計管理を担当して戴きました。つまり親子三代に渡って大変お世話になっております。

神社の境内で生まれ育ち、寶登山神社で四〇年間奉仕してきた中で、感じた事、考えた事、教育の事、お祭りの事、また東北地方大震災のことなど、「神の心と人の姿」という演題でお話したいと存じます。

（寶登山神社の由緒）

いろいろな神社で由緒書きを戴き読むこともありますが難しすぎて途中で読むのが嫌になってしまうということで、当社では物語風にしてあります。

今から約壱千九百年前に日本武尊一行が東国地方を平定され、凱旋の途次、山に登る途中、突然火事に遭われ進退窮まった時に、日本狼（通称お犬様と言っております）が火を消し止め、尊等一行を頂上まで導くと、また突然姿を消してしまいました。日本武尊は、御自分の祖先である神武天皇と山に登られたので山の神様、火事に遭われたので火の神様をお祀りになられたのが当神社の起源と伝えられております。

このお犬様、日本狼は山の神様のお使いである大口真神という神様がオオカミに姿を替えて現れ、火を消し止めた事から「火止山」と言い、お寺の由緒に宝珠が山に登ったという伝説と重なって、今は宝が登る山と書いて「寶登山」と言っております。

奥秩父に源を発した荒川、この荒ぶる川が寶登山の山懐で初めて水の静かな長い瀞となります。これを歌人鳥野幸司は「長瀞を御手洗（みたらし）にして此の里の鎮めと居ます寶登山の神」と歌い、明治の偉人渋澤栄一は「長瀞は天下の勝地」「寶登山は千古の霊場」と揮毫されました。寶登山は秩父連山にあって数少ない独立峰です。秀麗な山容は四季折々の美しさがあり、訪れる人の心を和ませています。自然は神々の恵みであり、山川草木豊かな自然に恵まれた寶登山は、まさに神々の鎮まり給う山です。世界中で戦争や紛争、貧困や飢餓等に苦しんでいる人々がいる中にあって、日本は平和であり、私たちは不自由なく暮らしています。

しかし、衣食が足りてなお、心和む場所、癒される時間を求めているのではないかと感じます。遥か悠久の昔、日本武尊がこの寶登山に登り、神武天皇・山の神・火の神を祀られたのも、神々や祖先への感謝の心であり、報恩の気持ちからであろう。更に東国地方平定という偉業を成し遂げ、戦いに疲れた人々を秀麗な寶登山の自然で癒そうとしたのではなかろうかと思っております。

（寶登山神社の特色と御鎮座壱千九百年記念事業）

江戸時代までは神仏習合の時代で、今も残っていますが会稽山玉泉寺住職が寶登山大権現と称してお祭りごとを執り行い、維持管理しており、火災盗賊除・諸難除の神様として信仰されて参りました。明治に入って神仏分離令、簡単に言えば神社とお寺をはっきり別けて住職が神社のお祭りをしてはいけませんという法律が出され、栄乗という方が還俗（僧籍を離れて）して神主の修行をして神職となりました。三峯神社のようにお寺を廃して神社だけになったのに対して、寶登山神社は当時の人たちが神社もお寺も残したいという事で、間に沢が有り、そこを境として、同じ境内地に神社とお寺が仲良く共存共栄しているというのが、最も大きな特色です。

この栄乗という方が江戸の末より明治七年に完成するまで、道具はあっても機械の無い時代に約三十年の歳月を掛けて今の社殿を建てて戴きました。それからは神社がお寺の維持管理をしておりますが、平成二十二年に御鎮座壱千九百年の節目の歳を迎え、記念事業として、社殿を改修し、彫刻には彩色を施し、創建当時に復興する事を第一の目的とし、老巧化した祈祷殿・神札所を新築致しました。多くの氏子・講社・講中・崇敬者の御支援を戴いて、無事に事業が終わりました。お陰様で埼玉県では初めてミシュラングリーンガイドジャポンに長瀞が掲載され、その中で寶登山神社は星をひとつ戴く事が出来ました。大変ありがたい事と思っております。

（神の心と人の姿）

まだ私が学生だった頃、聞いた話ですが、人には三つの姿があるそうです。

ひとつは　自分で考えている姿

もうひとつは　他人からみた姿

そして、もうひとつは　本来の姿

自分はこういう人間だと思っている。例えば自分がこう考え良かれと思って行動しているのに、何でわかってもらえないのだろう。そんな経験は誰にでもあると思います。他人は自分の事をどう思っているのだろうかと、私共凡人は気になって仕方がない。ここでゴーイングマイウェイ、他人がどう思おうがわが道を行けばよいと開き直れればいいのですが、なかなかそうはいかない。

これに対して、その人がもつ本来

の姿というものがあり、この本来の姿とは自分で考えている姿でもなく、他人から見た姿でもなく、つまり自分にも他人にもわからない。言い換えれば本来の姿とは神様しかわからない姿になろうかと思います。何かわかったような、わからないような話ですが、神社には神様の鎮まる本殿と人が拝む拝殿があります。神様の姿は普通の人には見ることが出来ませんし、声を聞くことも出来ません。只私は神様みたいな人はいるのではないかと思っております。神様みたいな人を気づかせて戴いたのは、河村さんという私の実家のある本庄の金鑽神社の総代さんを長くして戴いた方です。

この方は大変温厚で怒った顔をみたことがなく、もちろん敬神の念の深い方で、もう亡くなってしまいましたが、九十歳になっても毎日二キロの道を朝早く参拝に来ていましたし、物心両面で大変な貢献もされました。それだけでなく非常に穏やかで優しい目をしておりまして、まさに神様みたいな人だなあと感じておりました。

よく子供は神様からの授かり物といいます。私の長男が生まれた時、まさに神様みたいだなあと思いました。生まれてから三歳位までのいたいけな子供というのは、本当に無邪気で、つまり神様みたいな人とは邪な心のないということになろうかと存じます。人はみんな母親の体を借りて、神様の子供として生まれてくるんじゃないかと思った次第です。

ところがだんだん大きくなるにつれ、いろいろなしがらみの中で成長していく内に自分は神様の子供であるということを忘れてしまう。神様の子であるということを誰も教えてくれませんので、本人も知らないうちに普通の大人になってしまう。つまり、人は誰でも神様の子供であり、神様みたいな人であったわけです。

こういう事をもっと多くの人が気づき、小さい内から教えていけば、悪い事をする人が少なくなって世の中がもっと良くなるのではないかと思います。人は子供に教育を施し、その成果に一喜一憂し、なおもなかなか子離れが出来ず、結婚するまで親の責任と考えています。これに対して動物は生きる術を教えるだけでひとり立ちすると、子離れというよりむしろお互いにテリトリーを決めて、敵と成り得る場合もあります。

果たしてどちらが良いのか別にして、次の子孫を残すということは人も動物も同じであり、小さい内は大変可愛く神様の子供であることに変わりないと思っております。ただ違うのは、人は成長と共に神様の子供であることを忘れているのに対して、動物は無意識の内にそれを感じているのではないか。少なくとも動物は生きんが為にだけ動植物の命を取るだけですが、人は必要以上に動植物の命を無駄にしている事が多く、必要以上に無駄にすれば、自分も死に絶えるという食物連鎖の中で人間という動物と他の動物や植物、どんな生き物でもどちらが賢い生き方をしているのだろうかと考えてしまいます。

人と動物の違いは何か。人は文字を持っている、機械や道具を作りそれを使う、二足歩行出来るとかいろいろあります。ある本に目に見えるものを見る事は動物でも出来るが、目に見えないものを見るのが人間であると有りました。ただ、動物でも目に見えないもの、或いは力を感じ取っているのではないか。それは本能であり親が子供に対する思いやりと思っております。少し言い方を変えると、目に見えるもの、或いは目に見える事は目に見えない力によって支えられている。この目に見えないもの、或いは事とは神仏の力であり自然の恵みあり、それらの目に見えない力に感謝する事、そして信じる事が信仰であります。その信仰心があるか無いかが人と動物の違いではないかと思っております。

人は何のために生きるのかという事は永遠の課題で、正解の無い事ではありますが、先祖から繋がれてきた命を父母によって与えられた、その命を子や孫に繋げていく。その為に自分の出来る事を一所懸命する事が大事であると思います。私の両親はすでに亡くなっておりますが、母が自分の命を掛けて産んでもらった。つまり生命をもらった。その一点だけでも感謝して余りあると思っております。ましてや大学卒業するまで育ててもらった事をどんなに感謝しても足りない。只そう思うようになったのは三十を過ぎてからで、いささか遅すぎた感がありますが、まさに親孝行したい時には親はなしとはうまく言ったものだなあと実感しております。

（教育に思うこと）

教育は大変重要です。皆さんの中にも戦争を経験された方がいらっしゃるかどうか解りませんが、例えば大東亜戦争の事です。実際に戦場に行った人は戦争の悲惨さ厳しさ苦しさを身に沁みてわかっていると思いますし、誰もが戦争は良くないとわかっています。今の教育はその良くない戦争をなぜ日本がしなければならなかったか、どんな大義名分があったのか、当時の社会状況と世界情勢がどうだったのか、あるいは戦争回避に向けてどんな努力があったのか、更に戦争によって何が変わったのか、何か良くなった点はなかったのかというような原因とか経過とか結果とかを全く教えないで、只日本だけが悪い事をし、アジアの人たちに迷惑を掛けたのだから謝るのは当たり前だということのみを教えています。これでは日本という国を愛することは出来ませんし、その結果、国の代表者である総理大臣が靖国神社にお参りしただけでえらい騒ぎになってしまいます。中国や韓国などがいろいろ言うのは、外交上今でも利用出来るという意味でまだわかりますが、同じ日本人の中にそういう外圧を利用している人がいる。私はその点に最も憤りを感じてなりません。国のために殉じた人を国の代表者が慰霊をする。どこの国に行っても英霊に敬意を表するのは国際儀礼上当たり前のことです。ところが昔イギリスのエリザス女王が来日した時靖国神社へお参りしたいという打診があったそうですが、日本政府はそれを断っている。昭和天皇も今上

陛下もお参りを希望されても天皇陛下として何十年も参拝出来ないでいる。

それなら無宗教の誰が参拝しても問題ない施設を作りましょうということが検討されています。しかし、みんな靖国神社へ丁寧に祀られる事を信じて散華されていった人たちに対してこんな失礼なことはないと思います。それが御祭神である英霊の心であると存じます。今の日本があるのは英霊や爆撃等で亡くなった多くの人々の尊い犠牲の上に成り立っているという事を今の若い世代にもっと教えていかなければもっと悪い国になってしまうと思っています。

戦争を全く知らない世代が益々増えていきます。戦後七十一年経ちましたがそういう人々や最近では日本がアメリカやイギリス、オランダと戦ったことすら知らない人がいる現状です。事ある毎にお話し戴いたり、教えて欲しいと思います。

昨年は終戦七十年の節目の年に当たり、日露戦争が終わって百三十年の記念すべき年に当たりました。日露戦争の時、露西亜のニコライ二世は地中海の暖かい所でヨット遊びに興じていたそうです。これに対して明治天皇は寒い国で戦っている将兵を思い、冬でも暖房を使わなかったそうです。昭和天皇もまた然りで、今上陛下も普段の生活はまことに質素だそうです。そういう天皇陛下を仰ぐ日本はまさに武士道の国であり、もっと自信を持っていいのではないかと思います。

しかし、今の日本は、衣食は足りても礼節を忘れているのが現状です。これも教育や政治・経済・社会・家族等すべてがおかしくなっているのではないかと思っております。私もいざ衣食が足りなくなっても礼節を忘れないでいられるかというと全く自信が有りません。ただ衣食が足りなくなった時、人によって礼節を忘れるのに遅速があるとしたらなるべく遅くまで礼節を持ち続けたいと考えております。

教育の道は家族の教えで芽を出し、学校の教育で花が咲き、世間の教えで実がなると言われております。日本の近代化は明治維新からであり、文明開化の名の下に欧米流の価値観が流入し、様々な点で変動が起こり、倫理道徳が混乱していった。明治天皇はこれを憂いて教育勅語を煥発されました。要約すれば敬神崇祖・忠孝の道の教えであり、それは日本の普遍的な道徳でありました。そして戦後の教育は家族より個人を、公より私を、義務より権利或いは自由を優先する価値観での教育がなされています。この自由をわがままと勘違いし、権利をモンスターペアレントに代表される自分の都合だけを主張する人が多くなっているように思います。

先年若い国王が来日したブータン王国では、GNP（国民総生産）ではなく物質より精神の豊かさを重視する国民総幸福量（GNH）、つまり経済成長より国民が幸せと感じる度合いを優先させる政策を基本とした教育がなされているようです。経済は勿論大事な事であり個人の自由も権利も守られなければいけませんが、物が有り余って無駄にしている日本と貧しいけれども幸福と感じているブータンとどちらがいいのかやはり考えてしまいます。

（東日本大震災に思うこと）

平成二十三年三月十一日に東日本大震災がありましたが、これからは震災後という言い方が増えるかも知れません。助かった命と助からなかった命、助けられた命と助けられなかった命、人を助けようとして失った命、いろいろな命のある中で千年に一度という地震であり津波であり、二万人近い犠牲者の内、この津波さえ無ければ果たして何人の方々の命が救われたのか、おそらく地震だけの被害者は何百人程度だったかも知れません。またこの津波さえなければ福島の原子力発電所も大丈夫だったでしょうし、計画停電も無く企業に対する影響も少なかったでしょう。津波と放射能汚染被害さえなければと誰もが考えていると思います。

復旧・復興には長い長い時間が掛かると思いますが、東北のある町長さんが「明日に向かって或いは未来に向かって進む事はもちろん大事であるが、過去の歴史を振り返り、過去の歴史に学んだ上で復旧・復興をしていかなければならない」、そして東北の神社関係者の方が「いざという時いち早く立ち上がりまとまったのは祭りの仲間であった」というお話をされていました。

日本の伝統・文化に対する国民性或いは日本人の心を表していて、戦後驚異的な復興を成し遂げたように、きっと震災後も世界が驚くような復興を成し遂げてくれると思っております。犠牲になられた方や被災された方には申し訳ありませんが、蛇口をひねれば水が出る、スイッチを押せば電気がつくという当たり前と思っていた事がどんなに有難い事か、普通に生活出来る事の有り難さ、自然への畏れや感謝をもう一度考え直さなければいけないと思っております。そして震災に遭われた方々が先程申し上げた礼節を忘れる事無く、世界中から感動され尊敬された事はもっと誇っていい事だと思っております。

（神社と祭り）

神社という所は聖なる空間、言い換えれば清らなか場所であり、参拝する人々に清らかな心でお参りして戴く事が大変重要な事だと思います。気持ちよく来て戴いて気持ちよく帰って戴けるように心掛けています。私たちは日々の生活に追われている訳ですが、家庭の中で聖なる空間清らかな場所とはどこかということと考えますとやはり神棚や先祖を祀る御霊舎であろうと思います。お爺さんやお婆さん、お父さんお母さんが神棚や仏壇に手を合わせて拝んでいる姿を見て育った子供たちには、目に見えない声も聞こえないその空間に何か畏いものや先祖があって自分があるということを知らない内にまた理屈ではなく感じ取ることが出来ていて、神棚のない家の子供に対して情緒的にも安定し犯罪も少ないそうです。

現在日本の家庭の約五分の一の家庭しか神棚を祀っていないそうで、氏神様・鎮守様も大切にお守り戴くと共に日本の総氏神・総鎮守である

伊勢の神宮も変わらぬ御崇敬をお願い申し上げます。皆さんの家庭にはもちろん神棚を祀っている事と存じますが、皆さんの子供や孫が独立する時には是非神棚を祀るようにお勧め戴きたいと存じます。

神社にお参りする時に普通まずお賽銭を上げてから二拝二拍子一拝の作法でお参りを致します。よくお賽銭を投げると言いますが、皆さんも何か物をもらう時投げられたらあまりいい気持ちはしないと思います。ましてや神様にお供えするものですからそっと捧げるようにお賽銭箱に納めて戴きたいと思います。そしてお賽銭は何のために上げるのかと申しますと、罪穢れを祓って戴く為だと思って下さい。そしてお参りする時には日々お守りを戴きこうして元気にお参り出来た事に対してまず感謝し、次のお願い事をよく祈念し、更にそのお願い事に対して努力するという事を神様に誓って戴きたいと存じます。

また神社には色々なお祭りがあります。基本的にお正月には年の初めをお祝いし、春に五穀豊穣と諸産業の発展を神様にお願いし、夏には神輿を担いだり獅子舞を舞ったりして悪疫退散・疫病除けのお願いをし、秋には春お願いした稔の感謝の意味のお祭りをしています。例えば夏祭に神輿を担ぐ時わっしょいわっしょいと掛け声をかけますが、これは神様の心と人の心の和が一緒になるように、また地域の人々の心の和が一緒になるように「和一緒」から「わっしょい」となったようです。

皆さんはそれぞれお宝物をお持ちのことと思います。お子さんや家族であったり、友人であったり、先祖から伝わる物であったり田畑であったり、何か特別な物であったり、人それぞれですが、田から生まれた物を宝物と言えると思っております。そこには太陽の恵み・大地の恵み・水の恵みといった自然の恵みと人の力が合わさって初めて稲や野菜・果物といった農作物が出来ます。それを運んでくれる人、売ってくれる人、買ってくれる人、調理してくれる人、食べてくれる人、いろいろな人の力が合わさって、動植物の命を戴く訳です。自然の恵みや人の力によって生かされているという感謝の気持ちを忘れずに生活したいと思っております。お米を始め野菜や果物といった農作物や海や川や山で採れたものをお供えして、稔の秋の感謝のお祭は特に大事なお祭りです。

会社・企業にとっての宝物は工場の機械や設備も大変重要ですが、やはりそれを動かす人が宝物だと思います。同様に神社にとっての宝物は、神様は別格ですし、社殿・鳥居・灯篭・手水舎・社務所等の建築物や御神木を含めた樹木や境内地も大変重要ですが、やはり氏子・崇敬者が宝物です。今回の大震災でも高台に祀られた神社は津波の被害を免れ一時は避難所にもなりましたが、氏子が他の所へ移ってしまった地域の神社は残っても氏子がいないという状況にあるそうです。今後の復興により、氏子の方々がどのようになるかわかりませんが、神社も心の故郷、心の拠り所として大切に守られて行くものと思っております。

今年は西歳長い不況が続く中、早く景気を取り戻してほしいと思います。景気という気は経済の数字上で比較することが出来ますし、実際生活の中で肌で感じることも出来ます。病気という気は罹っては困る気ですし、短気もあまりいいことではありません。見ることも聞くことも出来ない気の一つが空気です。言うまでも無く空気は人が生きていく上でなくてはならないものですが、神社にも気があります。それは神社の霊気という清浄な気です。この霊気を頂くと私等人間は元気になりやる気が出てきます。皆さんも神社にお参りして、この清浄な霊気を沢山感じて戴き御元気でお過ごしいただきますよう心から御祈念申し上げます。

(終わりに)

皆さんは百年の森づくりを進めている方たちですから御存じだと思いますが、明治神宮の杜について少しだけお話し致します。明治天皇が明治四十五年に、昭憲皇太后が大正三年に崩御しお隠れになってから、御神霊をお祀りしたいという当時の国民の熱望により明治神宮が大正九年に創建されました。これに先立つ大正四年本多静六他二名が設計した林苑計画により、当時の東京はすでに公害により大木が枯れていく中で神社の杜は永遠に続くものでなければならない。それには自然林に近い状態を造る事が重要であり、樫や椎の木等常緑広葉樹・照葉樹を中心とした混合林を造れば人が手を加えなくとも自然に淘汰してゆく永遠の杜を造る事ができると考え、全国から全部で十万本の木を延べ十一万人に及ぶ青年団の勤労奉仕、今でいうボランティアの人たちが協力し五十年後、百年後を想定して造られた杜です。現在の杜は二百三十四種に及び珍しい植物だけでなく絶滅危惧種の虫や蝶や鳥等の動物も生きているそうです。

人は誰でも二人の親がいて四人の祖父母がいて八人の曾祖父母がいて先祖に繋がっていきます。その内の誰一人欠けても違っても今の自分は存在しない訳で、それは単に血の繋がりだけではなく命という血を引き継ぐ事であろうと存じます。それと同時に先人たちが育て守って来て戴いた鎮守の森や日本の自然・歴史・伝統・文化・祭を次の世代に繋げて行く事が大変大切な事と存じます。特に皆さん達の様に森づくりに携わり担っている事に深く敬意を表し厚く御礼申し上げますと共にこれからも宜しくお願い申し上げ、「神の心と人の姿」と題してお話させて戴きましたが一つでも参考となれば有難いと思います。

長時間に亘りご清聴ありがとうございました。

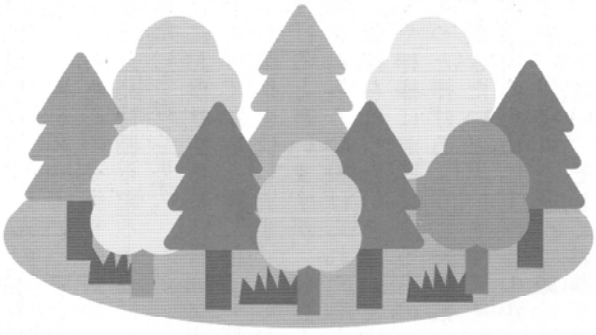
（文責　事務局）

平成二十九年七月二日

福島県田村市に植林した後の視察（三回目）

守谷　裕之

前回は秋真っ盛りの十月十八日に行き今回は七月二日ですから約九か月の間にこれほど木々が育っていることに驚きました。1m50㎝ぐらいの間隔で植えた苗木は周りの草木の成長の勢いに負けて光が当たらない。その間の草を刈るのは容易ではない。それなら強い木だけが残ればいいという考え方か森には手を入れていない。



ポット苗を1350個植えた上に当たる斜面は背丈以上に草木が生い茂っていた。
丸の中は一緒に行った仲間

斜面に入る入口

2016/10/18 → 2017/7/8

・高さ 2680㎝ → 2800㎝

・胴囲 13㎝ → 18㎝

一番大きいと思われるブナは

・高さ 3100㎝

・胴囲 20㎝

2014年4月に植樹して初めての冬を迎えたブナ。
(同じ斜面)

完全に枯れてしまった苗

草木に覆われても上手く生き延びている
ブナの幼木

アサノハカエデも頑張っていた。

蔓が巻き付いて締め付けていた。
釜で切る。

背丈以上の草木を分け入って植樹した木の回りを刈ってみる。

<田村森林組合事務所前の常設線量計の記録>

2013/10/18 → 0.10μSv/h　　2014/4/5 → 0.09μSv/h

2015/7/11 → 0.09μSv/h　　2017/7/2 → 0.08μSv/h

2017年度上半期

和名倉山森づくり報告

和名倉山森づくり事業担当　高岡正彦

和名倉山は、64年(昭和39年)と69年(昭和44年)に山火事が発生し、多くの樹木を焼失しました。その跡には成長の速いカラマツを植林するなど、森の復興が図られました。同時期、林業の衰退で山での仕事も少なくなり往来が激減し、多くのルートが2m以上のスズタケで覆われ藪の山となってしまいました。

そのような和名倉山を以前のような水を育む山に復元するために、97年埼玉大学ワンダーフォーゲル部OB会が活動を始めました。その後、NPO法人百年の森づくりの会として事業を拡大しています。00年までに失われた道の復元を行ない、01年には樹木の生長が遅いところに、和名倉山の在来種であるブナの苗を植林し始めました。植林を始めると、鹿による食害に悩まされ、植林よりも、現有樹木を守るほうが先と考えました。現在は現有樹木に鹿よけネット巻く作業が主になっています。03年には旧大滝村村有林の管理小屋だった仁田小屋を改修しこの事業のベースキャンプとしています。この小屋は会員の力でログハウス風に作り上げました。

(なお、和名倉山は山頂が県界でない埼玉県の山々における最高峰です。ご存じだったでしょうか?)

2016年度上半期

5月28・29日　第39回 植林ワーク
(仁田小屋整備・植林地整備)

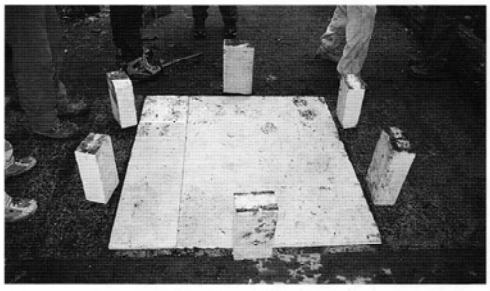
5月27・28日　第40回植林ワーク

今回のワーク(和名倉山での一連の作業のことをワークと呼んでいる)では前回に引き続き「仁田小屋整備」と「植林地整備」を行なった。

仁田小屋の下は当初から崩落地になっていた。ここを安定した緑地帯にしようと、フォレストベンチ工法を導入したのは2008・11である。斜面にネットで作った柵をアンカで固定し、ネットと斜面の間に土を盛ることで水平面を作り出す工法である。できた水平面に何度も植栽を試みたが、なかなか根付かない。雑草のハシリドコロもちょっと芽を出すがしばらくすると跡形もなくなってしまう。土壌の改良が必要ではないかと、まずは落ち葉などが定着しやすくネットを張る試みをしている。

玄関先の囲炉裏予定場所

腐った汚水を抜き取る作業



応急処置だが、いい感じだ

前回のワークで張ったネットの下から草が目を出しだしている。また、さらに下に仮植したブナ4本は定着したようで葉を十分に蓄えている。**小屋の玄関前には囲炉裏用の穴が開いている。**ここは、仁田小屋の設計段階では小屋の内部に位置するのだが、予算の関係で、小屋を縮小したので雨のあたる場所になってしまった。この穴は深さ10cmほどあり、腐った汚水が溜まっていた。これを丁寧にくみ取り仕上げは発砲スチロールを詰め込むことにした。いずれまた水は溜まるだろうが対処しやすくなった。

2日目は植林地整備に出かけた。**まずは犬ブナ平(標高1400m)である。**ここは広くネットを張り、落ちた種を食害から守り、苗が育つことを狙ったところである。しかし、風雪、倒木で何回もネットが倒れ期待した効果が表れていない。犬ブナ平の上部に犬ブナの原生林がある。そこに隣接する場所に植林地がある。

いずみの森と名付けた場所である。長瀞で冷温加工したブナを植林した。植栽1年目は寝付き、葉も茂ったのだが、ここもネットが倒れ鹿の餌食になってしまった。**一歩の森（1500m）は01年に植林した場所である。**その時植栽したのは13本（土をつけたままの苗、1本15～20kg）。そのうちの1本だけが残っている。その後ここには追加植栽をして、現在は32本育っている。**一歩の森の奥に日当たりのよいギャップ**（スペース）に植えたブナのうち、一本ずつにネットを巻いたものは7本残っている。ここは次回の植林の候補地と考えている。**仁田小屋の頭（標高1555m）から50mほどいったところにセカンドフォレストがある。**ここは当時、鬱そうをスズタケが密集していた。このスズタケを刈ってから植林をしていたのだが、刈った段階で周りの木々が鹿にかじられるようになったので、坪庭式にスペースをつくり、土つきのブナを植栽することにした。スズタケに覆われていたのでネットをかけずにいたのだが半年後にはすべて鹿にかじられて枯れてしまった。今思うと、その頃が、一番鹿が多かったころだと思われる。頻繁に鹿の「ピー」という鳴き声が聞こえたころである。仁田小屋の頭から尾根上に降りたところにミズナラの植林地がある。ポットで育てたミズナラを植栽したところである。1本ずつにネットをつけて70本ほど植えたものが、50本根付いている。まだ1mほどであるが、葉を十分蓄えている。この成長のよさは土壌が影響しているように感じる。次回はここにブナも植栽してみたいと考えている。

01年植栽したブナ

残った7本のブナ

日当たりのよいギャップ

今回は12名の参加者であった。例によっていずみ高校山岳部の生徒5名（全員1年）が参加している。このワークにおいて、彼らの存在はとても大きいものになっている。彼らがいなくては何もできなくなっている。また、何回か続けて参加する生徒の成長は目を見張るものがあると百年の森づくりの会のメンバーが語ってくれた。いずみ高校山岳部においても、登山活動で成長することはたくさんあるが、このように一つの山を登り続けることで（観察することで）得られることはまた特別なものに思えている。私はやや成り行きで踏み込んだ「和名倉山」であるが、彼らの姿を見るとこれからも続けていく大きなやりがいを感じている。

植林地整備を終えた高校生たち

長瀞町宝登山下刈り活動報告

2017年4月23日(日)、5月21日(日)、8月20日(日)

長瀞宝登山百年の森は、2007年10月に苗木が植栽されて、今年で10年が経ちました。今年は、昨年ツツジを160本追加植栽したので、4月23日、5月21日、8月20日の3回にかけて下草刈りを行いました。

4月23日(日) 晴天　11名参加

8時30分集合、9時より作業開始

参加人数が少なかったので、3時間、目一杯下草刈に汗を流しました。草は芽吹いたばかりなので、おもにツツジの斜面の蔓や枯れ草の除去を行いました。植栽時に立てた竹が残っていて、ツツジの苗が判別しやすく役立ちました。

5月21日(日) 晴天　7名参加

8時集合、9時より正午まで作業

前回より人数が少ないので、東側斜面を中心に作業を実施した。今年は、降雨が非常に少なく、草の伸びも少なく作業はいつもよりはかどりました。また、蜂の巣が全く無かったのが不思議でした。

8月20日(日) 曇り　59名参加

9時集合、10時から正午まで作業

今回は、毎年参加いただいています三井住友海上火災保険株式会社埼玉支店から45名、百年の森づくりの会から14名の合計59名で下草刈りを行いました。

9時に宝登山駐車場に集合し、開会式を行った後、各々徒歩とロープウエイで作業現場に向かい10時には作業を始めました。この日は、曇りでそれまでの暑さも少し和らぎ下草刈りには適した日になりました。残念ながら1名の方が蜂に刺されましたが、その他事故や怪我も無く、作業を無事に終わらすことが出来ました。

参加された皆さんには、本当にご苦労様でした。

（事務局）

平成29年度第10回通常総会開催

NPO法人百年の森づくりの会の平成29年度第10回通常総会が、6月11日（日）埼玉教育会館において開催されました。

当日は、平成28年度事業報告・収支決算案、平成29年度事業計画・収支予算案を審議いただき満場一致で原案通り承認されました。また、任期満了に伴い役員の選任案について、全ての役員を再任することで提案し、満場一致で原案通り承認されました。

役員は、以下の通りです。（敬称略）

理事長　小林公彦

副理事長　東　克明　高岡正彦　守谷裕之

常務理事　石関明稔　小室正人　野澤和雄　吉田兼紀

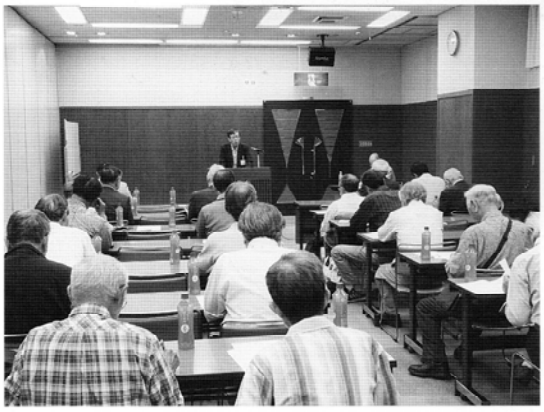
理　事　浅野純次　大熊光治　坂本和穂　内藤健三

監　事　宇津木正晴　玉熊英一

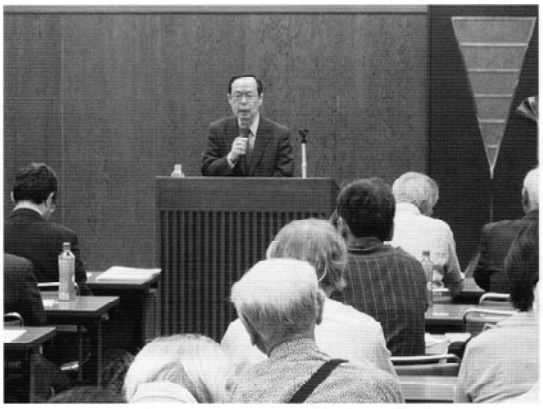
これからも宜しくお願いいたします。

総会終了後、「神の心と人の姿」と題して、寶登山神社宮司中山高明氏による記念講演会を開催しました。寶登山神社の由緒・特色、神と人との関わり、そして中山宮司が日頃感じていることなどについて有意義なお話を伺い、成功裡のうちに終了することができました。

（講演録は別途記載）



総　会



総会・記念講演会

宝登山

和名倉百年の森　第34号 2017年10月１日発行
発行者：NPO法人百年の森づくりの会　小林公彦

NPO法人百年の森づくりの会 事務局
〒330-0055 さいたま市浦和区東高砂町11-１コムナーレ９階
さいたま市市民活動サポートセンター内　メールボックスA-71
TEL/FAX：0480-22-3131
http：//www.100nen-forest.org　　e-mail：info@100nen-forest.org